

IV. 新型コロナウイルス感染症の病態、臨床的視点から

慶應義塾大学医学部 呼吸器内科 教授
福永 興壱

新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) 感染症 (COVID-19) は未曾有の感染症として全世界に蔓延し、医療の枠を超えその脅威が我々の生活を一変させた。2019 年暮れ中国武漢で原因不明の肺炎の拡大が報じられ、年が明けて 2020 年 1 月には国内最初の SARS-CoV-2 患者が確認された。そして 2 月横浜に停留したダイヤモンド・プリンセス号隔離措置、同月 WHO がコロナウイルス感染を「COVID-19」と命名すると、3 月には世界各国で“ロックダウン”が始まった。日本においても 4 月には 7 都道府県を対象とした非常事態宣言が発令され、毎日の報道がこの新興感染症一色になったといっても過言ではない。慶應義塾大学病院においても北川病院長を中心に「COVID-19 救命医療診療チーム」が立ち上がり、全科が協力してこの感染症の対応を行い、1 年前には誰もが想像し得なかった事態の中で診療を進めてきた。しかし一方で当初は先にも述べたように“原因不明”のウイルスとして多くの不安や恐怖に煽られたが、いまだわからないことは多くあるものの世界中の研究者達はその解明に努め、その姿が明らかになりつつある。一方で急性呼吸器感染症にとどまらず罹患時あるいはその後合併症、後遺症が出現することが海外を中心に相次いで報告されており新たな不安の一因にもなっている。本講演では今回のこの新興感染症「COVID-19」についてこれまでの報告されてきた知見ならびに我々の施設が行った臨床研究などを中心にその病態について臨床的視点から概説したいと考えている。